

第4巻

業務切替時の 事故防止

身体が戻っても、
頭を戻してから動く
——会社が守る「運転へ戻る時間」

Preventing Accidents During Work Transitions

臼井 稔清

Toshikiyo Usui

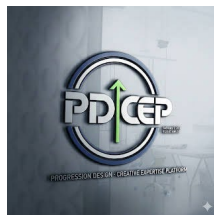
とちぎ安全教育センター株式会社 代表取締役

一般社団法人GLB物流人材育成機構 代表理事

業務切替時の事故防止

身体が戻っても、頭を戻してから動く

会社が守る「運転へ戻る時間」



著者 臼井 稔清

初版 Ver.1.0

本書の位置づけと注意事項

本書は、運送会社経営者、運行管理者、安全担当者、教育担当者、教習指導員が、ドライバーを理解し、業務のつなぎ方を見直すための事故防止教育読本です。

ドライバー本人に「もっと注意するように」と求めることを目的としていません。荷役、納品、伝票処理、顧客対応、待機、休憩などから運転へ戻る境目に、会社としてどのような支援を置くかを扱います。

本書の中心メッセージは、事故は運転中のミスだけで始まるのではなく、前の業務から運転へ切り替わらないまま動き出すところから始まることもある、ということです。対策は注意喚起ではなく、次の仕事を思い出せる時間と合図を会社が用意することです。

本書で用いる「業務切替不全」「前業務残留」「次工程想起不全」は、病気、能力低下、乗務適性を判定する言葉ではありません。前の業務で使っていた注意や感情が残り、次の業務に必要な最初の確認や危険予測が立ち上がりにくい状態を、教育と業務改善のために表した言葉です。

本書の内容を、個人の処分、配置転換、乗務可否の判断にそのまま使用しないでください。事故防止教育、面談、点呼、業務改善を通して、本人が安全行動へ戻りやすい条件を整えるために使用してください。

本書の読み方

第 4 巻は「業務のつなぎ方」を扱う

第 1 巻は事故前の入力、第 2 巻は安全行動の再現を揺らす内面、第 3 巻は進まない・下がるという行動選択を扱いました。第 4 巻は、それらを詳しく繰り返すのではなく、運行管理者や安全担当者が業務の境目を安全工程として設計する方法を扱います。

第 1 章と第 2 章では、業務切替点に何が起き、なぜ管理の空白になりやすいかを整理します。第 3 章から第 6 章では、荷役後、顧客対応後、休憩後、構内退出前という現場場面から、切替を難しくする条件を見ます。

第 7 章では、短い切替時間を個人の習慣で終わらせず、会社の仕組みにする方法を扱います。その具体的な合図として、十五秒リセットを位置づけます。第 8 章では事故やヒヤリハットを切替点から聞き取る方法、第 9 章では教育と日常管理への組み込み方、第 10 章では切替支援を安全文化として定着させる考え方を示します。

本書は社内講習、事故後面談、点呼、同乗指導、適齢・初任運転者教育の補助教材として使用できます。どの場面でも、本人を採点する資料ではなく、切替を難しくした条件と必要な支援を安全担当者や教育担当者が見つかる資料として扱います。

章末の「管理者への問い」は、ドライバーへ答えさせる試験ではありません。自社の配車、連絡、点呼、現場運用を会社側が振り返るための問いです。付属資料は、会社の実情に合わせて言葉を調整し、支援を具体化するために使用してください。

目次

はじめに 事故は、業務の境目から始まることもある.....	5
第 1 章 仕事は終わっても、注意は終わっていない	7
第 2 章 切替点は、なぜ安全管理の空白になるのか.....	13
第 3 章 荷役後の再出発をどう見るか	19
第 4 章 納品・顧客対応後に残るもの	25
第 5 章 休憩後・中断後は、本当に戻れているか.....	31
第 6 章 構内退出前の最初の 30 秒を守る.....	37
第 7 章 業務切替を「個人の習慣」で終わらせない.....	43
第 8 章 切替点から聞き取る	49
第 9 章 切替支援を教育と日常管理へ組み込む	55
第 10 章 安全は、業務と業務の間につくられる	61
おわりに 境目を守れば、ドライバーは安全へ戻れる	67
付属資料 理解確認・管理者の気づき試問	69
付録 A 業務切替点マップ	71
付録 B 管理者用 切替点聞き取りシート.....	73
付録 C 業務切替 15 秒リセットカード	75
付録 D 90 分講習の展開例	77
本書を講習で使う場合	79
奥付	80

はじめに

事故は、業務の境目から始まることもある

荷下ろしが終わりました。伝票の訂正があり、納品先の担当者と短い話をしました。予定より十五分遅れています。運転席へ戻る途中で、次の納品先について連絡が入りました。

ドライバーは車内へ戻り、エンジンをかけ、車両を動かしました。構内出口へ向かう最初のわずかな時間に、作業者や自転車の発見が遅れました。

**事故は、運転中ではなく、
運転へ戻る途中から始まることもある。**

事故やヒヤリハットの後、運行管理者は「なぜ確認しなかったのか」と聞きます。本人は「確認したつもりでした」「急いでいたのかもしれない」と答えます。ここで話が終わると、対策は「次から気をつける」に戻ってしまいます。

しかし、このドライバーは、確認の必要性を知らなかったのでしょうか。普段から確認ができない人だったのでしょうか。そうとは限りません。

見るべきなのは、車両が動き出した瞬間だけではありません。その直前に何の仕事をしていたのか。何が頭に残っていたのか。運転へ戻る合図があったのか。最初に起こり得る危険を思い出す時間が守られていたのか。事故の入口は、前の業務と運転の間に隠れていることがあります。

事故場面だけを調べると、原因は「見落とし」「慌て」「確認不足」に集約されます。ところが、安全担当者が直前の業務まで時間を戻すと、本人の行動だけでは説明できなかった流れが見えてきます。

「切替」は、本人だけの仕事ではない

現場では、一日の業務が途切れず続いているように見えます。運転し、荷物を降ろし、伝票を受け取り、連絡を確認し、再び運転する。会社の予定表では、これらが一つの運行として並んでいます。

けれども、本人に求められる注意は同じではありません。荷役中は荷物、足元、周囲の作業員へ注意を向けます。顧客対応中は相手の言葉や伝票内容へ注意を向けます。運転へ戻れば、車両周囲、構内出口、歩道、後方、次の交通場面へ注意を組み替えなければなりません。

作業が変われば、注意の向きも変える必要があります。その切替に必要な時間が、業務として扱われていないことがあります。荷役が終わった瞬間に次の運行が始まり、端末の通知や無線が入り、遅れを取り戻す空気が生まれます。配車担当者に悪気がなくても、運転へ戻る準備時間を削っていることがあります。

本書が扱う十五秒は、秒数どおりに止まれば事故が減るという手法ではありません。前の仕事をいったん終え、これからの仕事を思い起こす時間を会社が守る。その考え方を現場で忘れないための象徴です。

会社側が最初に行うべきことは、ドライバーへ新しい確認項目を渡すことではありません。自社の一日の中に、どのような切替点があるかを見つけることです。荷役から運転、待機から運転、電話対応から運転、休憩から運転へ戻る場所を具体的に洗い出します。

身体が運転席に戻っただけでは、頭まで運転に戻ったとは限りません。その違いを理解することが、業務切替時の事故防止の出発点です。

Web掲載用抜粋版について

本PDFは『業務切替時の事故防止』の一部を、著者および発行者の許諾に基づき公開するものです。

収録範囲：本文 1～6ページ

著者：臼井 稔清

発行：とちぎ安全教育センター株式会社

書籍の詳細・購入

Amazonで見る

<https://www.amazon.co.jp/dp/B0HD6B1KP9>

本PDFおよび収録内容の無断転載、複製、配布、改変を禁じます。